京劇における《尖團》について

安　念　一　郎

まえがき

いやしくも京劇を唱う者は《尖字》《團字》について，また《上口字》についての十分な知識がないと《尖團不分》の誇りを受けることは必定であり，たとえそれが《票友》であっても古典京劇について云々する資格はないといっても過言ではあるまい。京劇のうたとせりふはそのすべてを現代北京語の発音でやったのではどんなに好い声で，いかに調子よくやったとしても物笑いの種になるだけである。本稿ではまず《尖字》と《團字》について述べるまえに，順序として《韻白》と《京白》，《調類》と《調値》についてひとこと触れたあと本論にはいりたい。《上口字》についての論述は別の機会に本紀要の次号以降または本学アジア研究所紀要のいずれかに発表したいと考えている。

《韻白》と《京白》

京劇はもともと安徽，湖北の両省ではやっていた芝居であるところから，うたやせりふのなかには南方の方言音が多くとりいれられている。そのため北方出身の役者たちはこれら北京音に存在しない特殊な発音の字を標記して覚えるために，いまの話しことばではとくに必要のない万・兀・广の三つの注音符号がどうしても必要となってくる。また子音の虫・彳・尸・日・卩・ㄘ・ㄙの後半音として発音される特殊母音の ㄭ は現代北京語学習

のさいとくに書いて教えるまでのこともないし，省略するのが普通となっているが，京劇のうたやせりふを習うばあい，これは北京音を南方音と区別するためにどうしても必要な符号の一つとなってくるので，ぜひ覚えておかないといけない。万・兀・广なども今日の北京語学習では必要のない符号であるが，京劇をやる者にとっては帀と同様に欠くことのできない符号となっている。

北京音を用いないで南方音で発音する字をすべて京劇では《上口字》と呼び，さらにまた《尖字》と《團字》の区別を厳格に要求している。

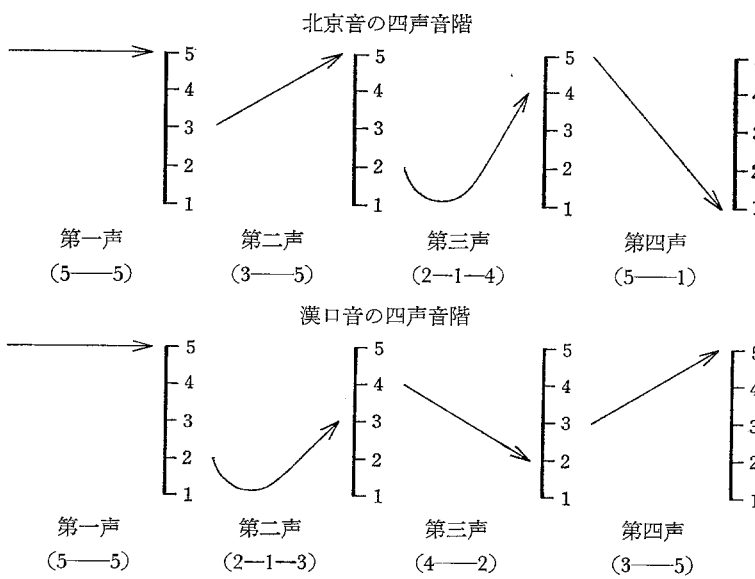
このほか，役柄によって例外はあるが，そのうたやせりふは四声の調子も北京語の四声の音階と違った南方語の四声の音階によらねばならない。このように発音や四声が南方音で発声されるうたやせりふを《韻白》と称し，その反対に，現在の北京語とまったく同様の発音，四声で語られるうたやせりふを《京白》と呼んで，両者をはっきりと区別している。《京白》をつかうのは，道化役を演ずる《丑》と，若くて奔放な女性を演じる役柄の《花旦》だけで，その他の役柄は原則として，すべてこの京劇特有の《韻白》を用いなければならない。《京白》という呼称は《韻白》にたいしてつけられた呼称であるが，このほうは純粋な北京語であり，なにもことさらに説明を加える必要はないので，ここではもっぱら《韻白》について述べてみよう。

《韻白》は必ずしも劇中のうたやせりふのすべての漢字が南方音で発声されるとはかぎらず，北京音で発声される漢字もたくさんあるのであるが，その場合でも四声だけは北京語の四声の調子ではなく，南方語の四声の音階によらなければならないことになっている。《韻白》によってせりふを述べることを，とくに《咬字》と言っている。《京白》は北京における日常の話しことばと変らないから，北方出身の役者はもちろん少しも困難を感じないが，南方出身の者にとっていえば，《京白》は自分たちの日常の話しことばと違うのであるから，その発音や四声の調子をのみこむのには相当苦労するといわれている。逆に，《韻白》は南方で日常話されている

ことばなので，南方出身の役者は何の苦労もしないが，北方出身の者は自分たちの話しことばと違うので発音や四声の調子を覚えるのに苦労し，一字一字にとらわれすぎて劇中人物になりきる余裕がなく，そのためイントネーションは失われて一本調子になり，強調すべき個所も，そうでない個所も区別がつかず，時には意味が通じにくくなることもあるとまで言われている。

《調類》と《調値》

京劇のせりふを聴いていて，まず気づくことは発音も四声も北京における日常の話しことばとはずいぶん違うということであろう。これは，《京白》の場合はもちろん問題はない。ただ，《韻白》の場合は，すべての字が《湖廣調》，つまり漢口を中心とする湖北，湖南の話しことばの調子で発声されているからなのである。さて，北京音と漢口音の両者の四声を比較してみると，四声のうち，第一声だけは北京も漢口も同じ要領で高く平



らな調子で発声するが，その他の声調は，北京と漢口とでは図のように音階の上で相違がある。

京劇のうたやせりふは，《韻白》のときは，すべての字が漢口音の四声音階によらなければならない。上記の音階表でもわかるように，第一声の字だけは，北京音と同じ調子で読むのであるが，その他の声調は調子がすべて違うのである。漢口音では，第二声の字は北京音の第三声の音階に似た調子で，第三声の字は北京音の第四声に近く，また，第四声の字は北京音の第二声の音階と同じ調子で発声しなければならない。これは，それぞれの漢字自身のもつ四声そのものが，北京と漢口とで違うのではなく，四声の音階が同じではないということである。例えば，衣は北京でも漢口でも第一声，移は北京でも漢口でも第二声，以は北京でも漢口でも第三声，意は北京でも漢口でも第四声の字なのであって，ただ，それを発声するときの調子は第一声の字を除いてすべて同じではないということである。《調類》は一致するが《調値》は第一声のほかは同一でないというのはこのことを言ったものである。ただ，ここにひとつたいせつなことは，むかし《入声》の調子で読まれていた字については，北京と漢口とでは，その《調類》さえも一致していないものが多いので，《入声》の字については，とくに注意しなければならない。この点については後述することにしよう。

《調類》と《調値》との関係は次のように表示することができる。

例字	調類	北京調値		漢口調値	
		声調グラフ	音階	声調グラフ	音階
衣媽蝦方	第一声	˥	(5——5)	˥	(5——5)
移麻仁言	第二声	˧˥	(3——5)	˨˩˧	(2—1—3)
以馬炒很	第三声	˨˩˧	(2—1—4)	˥˩	(4——2)
意罵麺乱	第四声	˥˩	(5——1)	˧˥	(3——5)

さて，北京における話しことばでは，《声調》といえば，第一声・第二

声・第三声・第四声のいわゆる《四声》があるだけであるが，南京・紹興・広州・潮安など南の地方では，今日でも《四声》のほかに《入声》という調子が日常話しことばのなかで使用されている。日本語の「発奮する」というときの発は「ハッ」という促音をともなった短かい音で，口の形は次に奮を発声する関係上，両唇がしっかり閉じられている。同じように，「発達する」というときの発も，「発見する」というときの発も，すべて「ハッ」という短かい，つまったような音であるが，発声直後の口の形には若干の違いがある。すなわち，唇や舌の位置などは，それぞれ，次に続く字を発声する直前の状態にあるわけである。

発「ハッ」奮（p）＝ha（p）

発「ハッ」達（t）＝ha（t）

発「ハッ」見（k）＝ha（k）

このように，促音をともなった，ごく短かい調子を《入声》と呼んでいる。つまり，《入声》は第一声の調子に似て，高く平らであるが，ただ，《入声》の調子は第一声に比べ，きわめて短かく，つまった音であるということができる。わかりやすく説明するために，日本語の例を挙げてみたが，広東省の潮安では発をㄈㄚㄅと読み，広州ではㄈㄚㄊと読んでいる。また，かれらは答をㄉㄚㄍというようにいずれも促音をつけて，短かく，つまったように発音している。もちろん，これらのㄅ，ㄊ，ㄍの音は人の耳に聞こえない程度のもので，ただそれらを発音するさいの口の形をするだけでよいのである。

日本語で音読してみて，「フ・ク・ツ・チ・キ」が語尾につく漢字は《入声》の字であると思ってまずさしつかえない。これら《入声》の字は，北京でも昔は《入声》の調子で読んでいたのである。元の時代に周徳清が《中原音韻》という発音字典を著わしたが，その頃から北京では《入声》の調子がしだいになくなって，それまで北京で《入声》として読まれていた字は，あるものは第一声，あるものは第二声，あるものは第三声，また，あるものは第四声と，それぞれ四つの調子のうちのいずれかの調子をもつ

ようになった。したがって，現在の北京語には《入声》で読む字はなく，昔《入声》で読んでいた字は，現在では四声のうちの第何声かの調子をもった字になっているわけである。

さて，京劇の《韻白》では，漢口の四声が用いられることは，さきにも述べたとおりである。また，南京・紹興・広州・潮安など南の各地では，話しことばのなかに現在もなお《入声》の調子が使用されていることも前述のとおりであるが，漢口では北京と同様に《入声》の調子はない。ただ，幕，劃，隻，億，玉など，ごくいくつかの《入声》の字を除いて，漢口の話しことばでは，《入声》の字が，ほとんどすべて第二声（音階は 2—1—3 で北京語の第三声に似ている）で発声されているという点が北京語の場合との大きな違いである。したがって，《韻白》によって京劇のせりふを言う場合，むかし《入声》で読んでいた字は，だいたいにおいてすべて第二声（音階は 2—1—3）で発音しなければならないということである。

次の表を見れば，むかし《入声》の調子で読まれていた字が，現在では北京と漢口とで，どのように違うかを対照して判断理解することができよう。

旧《入声》例字	北京			漢口		
	調類	調値		調類	調値	
		声調グラフ	音階		声調グラフ	音階
哭桌出瞎	第一声	˥	5—5	第二声	˨˩˦	2—1—3
革國白学	第二声	˧˥	3—5			
穀鉄北百	第三声	˨˩˦	2—1—4			
客式緑葉	第四声	˥˩	5—1			

以上述べたところから，《調類》と《調値》について，次のように言うことができる。

1.　むかし《入声》で読んでいた字は，北京と漢口とでは，現在の《調

類》が必ずしも一致していない。

2. むかし《入声》で読んでいた字を除いて，北京と漢口とでは，すべての漢字の《調類》が同じである。しかし，第一声を除いて《調値》は同じでない。

ところが，実際問題として，うたやせりふのなかで，とくに不だけは《入声》の要領で発声する役者を見かける。これは主として，ひげをつけたおとこ役を演じる《老生》の場合に見られる例であるが，この不という字は，むかし《入声》で短かくつまって発音された字であり，《韻白》ではもちろん漢口の音階の第二声の調子で読むのがたてまえであるが，この字にかぎって京劇のうたやせりふのなかでむかしの《入声》の調子のまま読む者がいる。その理由は，《入声》の促音がもつ，はげしい語勢をことさら強調してつかうことにより，うたやせりふに緊張感をもりあげ，その歯ぎれのよさと相まって観客の共感をよぼうとするためにほかならない。また，京劇には《噴口》というのがあって，ㄆとㄈのふたつの子音にかぎり，とくにはげしく発声してきわだたせようとすることがある。ㄅは無気音であるから，もちろんこれを適用できないのであるが，それでも時に不をわざわざㄆㄨと《噴口》して発声することにより，歯ぎれのよさを聴かせようとする者がいたことはたしかだが，これは必ずしも正しい唱いかたとはいえない。

《尖字》と《團字》

北京語では，祭，寄はどちらもㄐㄧと読み，聚，句はどちらもㄐㄩと読むが，京劇の《韻白》では，祭はㄗㄧ，寄はㄐㄧと読み，また，聚はㄗㄩ，句はㄐㄩと発音しなければならない。すなわち，北京語で読んでみて，子音のㄐ，ㄑ，ㄒの次に母音のㄧ，ㄩまたはㄧ，ㄩを韻頭とする結合母音がついた字は，《韻白》では，ㄐ，ㄑ，ㄒから始まるものと，ㄗ，ㄘ，ㄙから始まるものと，ふたとおりに分類されるということである。北京語では，

ㄗㄧ，ㄘㄧ，ㄙㄧ……とか，ㄗㄩ，ㄘㄩ，ㄙㄩ……という音は十九世紀初頭すでになくなっているが，河南省一帯では，ㄐㄧ，ㄑㄧ，ㄒㄧ……やㄐㄩ，ㄑㄩ，ㄒㄩ……のほか，なお，《中州韵》といって現在の北京語には存在しないこれらの音が現在でも使用されている。京劇は北京を中心として発展したものではあるが，その発祥地がもともと南方であるため，うたやせりふには，これら南方の方言音が伝統として今もなおいぜんとして残っているのである。

さて，子音のㄗ，ㄘ，ㄙに母音のㄧ，ㄩまたはㄧ，ㄩを韻頭とする結合母音（すなわち，ㄧㄢ，ㄧㄣ，ㄧㄤ，ㄧㄥ，ㄧㄡ，ㄧㄠ，ㄧㄝ，ㄧㄚ，ㄧㄞ，ㄩㄢ，ㄩㄥ，ㄩㄝ）をつけて発音する字を《尖字》といい，これにたいし，ㄐ，ㄑ，ㄒから始まる字を《團字》と呼んで，この両者は，はっきり区別されている。うたやせりふのなかで《尖》《團》を区別しないと，たとえ声がどんなに好くても，また節まわしが如何にたくみであっても役者としては不合格である。この《尖字》と《團字》の見分けかたは，日本人にとってはわりに簡単で，漢字を日本語で音読してみて，サ行音で始まっていれば《尖字》であり，カ行音であれば《團字》であると思ってまず間違いない。また，《尖音》と《團音》のどちらに読んでもよいという字は原則として存在しない。次に，《尖字》と《團字》を発音別に対照して眺めてみよう。四声は表中①②③④であらわした。なお，《入声》の字は「調類と調値」のところで説明したように，京劇の《韻白》のなかでは，原則としてすべて第二声に読まれる。したがって，この表の中では，《尖字》の場合であれば例えば北京語で第二声に読む跡，積……，第四声に読む稷などはいずれも《入声》の字であるから，すべてㄗㄧの第二声の欄に書きいれておいた。《團字》についても同じことで，例えば北京語で第三声に読む乞や第四声に読む泣などもともに《入声》の字であるから，すべてㄑㄧの第二声の欄に書きこんである。わかりよくするため，第二声の欄は初めに《入声》以外の字をならべ，《入声》の字はㄟ印のあとに一括してならべておいた。《入声》の字が，若干の例外を除いて，そのほと

んどすべてが第二声になり，しかも漢口における第二声の調子で発音されるというのは，あくまでも《韻白》の場合に限られ，《京白》のときは，前にも述べたように，ある字は第一声，ある字は第二声，ある字は第三声，ある字は第四声となる。つまり，《京白》の場合は，現在の北京における話しことばと同じであって，今日の北京語の四声の音階で発音しなければならないということを忘れてはならない。例えば，泣という《團字》は《入声》の字であるから，《韻白》のときは第二声になり，漢口の《調値》をつかって（2—1—3）の音階で発音しなければならないが，《京白》のときは，あくまでも北京の話しことばと同じように，北京の《調値》で第四声（5——1）に読まなければならない。また，《尖字》の戚を例にとると，この字は《入声》の字であるから《韻白》ではやはり漢口の《調値》で第二声となり，《尖音》でㄑㄧ（2—1—3）と発音しなければならないが，《京白》では北京語と同様に，北京の《調値》で第一声（5——5）に読み，しかも現在の北京語では《尖》と《團》を分けないから，北京における話しことばと同様にㄑㄧと発音すればよいのである。この点については別の機会に論ずる予定の《上ロ字》に列挙する対照表についても同様であり，《入声》の字はすべて《韻白》のときの参考に資するため，第二声の欄にまとめておいた。また，右肩に＊印のある字は《破音字》であることを示すものである。正字と俗字はならべて，その下に横線をほどこしたが必ずしも正字と俗字の両方を書いていないものもある。

團音	團　　字	尖音	尖　　字	備　考
ㄐㄧ	①奇*・剞・畸・犄・羈・羈・肌・基・期*・朞・箕・姬・幾*・機・嘰・譏・璣*・磯・畿*・飢・饑・雞・笄・稽*・嵇・乩・觭	ㄗㄧ	①躋・齎・賚・齋	
	②入 激・屐・及・伋・汲・岌・圾*・笈*・級・急・吉・咭・擊・戟・吃*・亟・極・殛・棘・給・茇・佶		②入 跡・蹟・迹・積・績・勣・集・輯・楫・戢・蕺・即・唧・鯽・脊・瘠・蹐・鶺・疾・蒺・嫉・藉*・籍・踖・寂・稷	ㄐㄧ，ㄗㄧともに第二声の字はすべて《入声》である。

	③几・己・紀・幾・蟣 ④覬・寄・騎・技・伎・妓・芰・冀・鰣・驥・既・暨・季・悸・記・忌・跽・計・繫・繼・髻・瘈・薊		③濟・擠 ④劑・濟・薺・霽・祭・際・滌	
ㄑㄧ	①欹・欺・期・朞・蹊・溪 ②祇・芪・岐・歧・跂・畿・奇・琦・崎・錡・騎・耆・鰭・祁・其・期・朞・旗（旂）・棋・棊・碁・萁・綦・蜞・琪・騏・淇・祺・麒・俟・祈・頎・蘄・圻・入乞・迄・訖・屹・泣 ③綺・起・杞・豈・啓・稽・棨 ④企・跂・棄・器・氣・汽・契・憩・憇	ㄘㄧ	①妻・淒（凄）・悽・萋・棲・栖・沏（～茶） ②齊・臍・薺・入七・柒・漆・戚・慼・緝・葺・碛・沏 ③ ④妻・砌	
ㄒㄧ	①羲・犧・曦・僖・嬉・禧・嘻・熹・熙・希・歔・晞・稀・唏・悕・奚・傒・徯・畦・蹊・溪・谿・兮・攜・携 ②入吸・扱・覡・檄・翕・歙・隙・閱 ③喜・憙・禧・嬉 ④戲・戲・餼・系・係・繫・盼・禊	ㄙㄧ	①西・棲・栖・粞・犀・樨・撕 ②入悉・蟋・膝・析・晳・蜥・晰・淅・習・褶・襲・隰・席・蓆・錫・裼・昔・惜・腊・息・媳・熄・烏・夕・汐・穸 ③徙・蓰・屣・璽・蒔・洗・洒 ④細	
ㄐㄧㄚ	①加・枷・珈・迦・痂・笳・袈・嘉・家・傢・葭・佳 ②入甲・岬・胛・夾・浹・	ㄗㄧㄚ	① ②	該当する《尖字》なし

	袂・鋏・莢・頰・郟・恝・戛 ③假・賈・斝 ④架・駕・嫁・稼・價・假		③ ④	
ㄑㄧㄚ	① ②入掐・恰・洽・帢 ③卡 ④	ㄘㄧㄚ	① ② ③ ④	該当する《尖字》なし
ㄒㄧㄚ	①蝦 ②瑕・霞・遐入瞎・俠・狹・挾・硤・匣・洽・狎・柙・呷・黠・轄・嚇 ③ ④下・夏・廈・暇・鰕	ㄙㄧㄚ	① ②邪 ③ ④	
ㄐㄧㄝ	① ②入刦・刼・劫・潔・絜・結・桔・詰・劼・擷・頡・揭・桀・傑・杰・羯・碣・竭・偈・訐・孑 ③ ④	ㄗㄧㄝ	①嗟 ②入接・捷・婕・睫・箑・蝶・節・櫛・癤・截 ③姐 ④借・藉	「皆・結・解・介…」など《入声》以外の《團字》は《韻白》のなかで，すべてㄐㄧㄞと変化するので本欄には記載しなかった。《上口字》十一を参照
ㄑㄧㄝ	① ②茄・伽入怯・愜・箧・鍥・契・挈・揭 ③ ④	ㄘㄧㄝ	① ②入妾・切・竊 ③且 ④	
ㄒㄧㄝ	① ②入血・穴・歇・蠍・蝎・協・纈・脇・脅・叶・洩・俠・挾・頡・擷・襭・絜・渫 ③	ㄙㄧㄝ	①些 ②斜・邪入渫・媟・屧・燮・躞・褻・偰・楔・屑・絏・紲・洩・泄 ③寫・瀉	「鞋・蟹・懈…」などのように《入声》以外の《團字》は《韻白》のなかですべて

	④		④卸・瀉*・謝・榭・曳*	ㄒㄧㄠと変化するので本欄には記載しなかった。《上ロ字》十一を参照
ㄐㄧㄠ	①驕・嬌・交・徼*・郊・茭・蛟・跤・鮫・姣・膠・教*・澆 ② ③狡・皎・絞・鉸・佼・餃・攪・筊・皦・繳・僥・徼*・矯・撟 ④叫・教*・校*・較・轎・窖・覺*	ㄗㄧㄠ	①焦・礁・蕉・僬・鷦・椒 ② ③剿*・勦・湫* ④醮	
ㄑㄧㄠ	①蹻・蹺・磽・敲・橇* ②喬・僑・橋・礄・蕎・翹・荍 ③巧 ④竅・撬	ㄘㄧㄠ	①鍪・鍬 ②樵・瞧・憔・顦・譙 ③悄・愀 ④俏・峭・誚	
ㄒㄧㄠ	①囂・枵・虈・猇・哮・嘵・驍・梟 ②爻・肴・餚・殽・淆 ③曉 ④效・効・傲・校*・孝・酵	ㄙㄧㄠ	①簫・蕭・瀟・宵・消・硝・銷・綃・霄・逍 ② ③小・筱 ④肖・鞘*・嘯・笑	
ㄐㄧㄡ	①鳩・糾*・鬮 ② ③久・玖・灸・韭・韮・九・糾*・赳 ④救・疚・柩・究・廐・咎・臼・舅・舊	ㄗㄧㄡ	①啾・揪・湫* ② ③酒 ④就・僦・鷲	
ㄑㄧㄡ	①丘・邱・坵・蚯 ②仇*・求・球・毬・裘・逑・賕・俅・蚪・虬 ③糗	ㄘㄧㄡ	①秋・鞦・鰍・鰍 ②酋・遒・蝤 ③	

	④		④	
ㄒㄧㄡ	①休・咻*・庥・貅・髹 ② ③朽 ④臭*・嗅	ㄙㄧㄡ	①羞・鎀・修・脩 ②囚・泅 ③ ④秀・繡・綉・鏽・銹・岫・袖・宿*	
ㄐㄧㄢ	①閒*・艱・堅・肩・姦・奸・菅・兼・鰜・縑・鶼・緘・椷・監*・犍・韉 ② ③柬・揀・蹇・謇・簡・鐧・襇・筧・繭・跰・瞼*・檢・撿・瞼・儉*・鹼・碱・減・減 ④建・健・毽・鍵・諫・閒*・澗・見*・件・監*・檻*・鑑・鹽・艦・儉*・劍	ㄗㄧㄢ	①箋・戔・箋・牋・湔・楾・鬋・煎・殲・尖 ② ③翦・剪・譾・戩 ④薦・箭・荐・洊・賤・濺・踐・餞・犂・僭・漸	
ㄑㄧㄢ	①搴・褰・騫・慳・鉛・牽・愆・謙・嵌 ②虔・乾・掮・鈐・黔・箝・鉗 ③遣・譴・繾 ④縴・歉・欠・芡	ㄘㄧㄢ	①遷・韆・千・仟・阡・芊・扦・僉・簽・籤 ②前・錢・潛 ③淺 ④茜・倩・蒨・塹	
ㄒㄧㄢ	①掀 ②閑・閒・嫺・嫻・癎・賢・弦・絃・舷・咸・鹹・酸・嫌・銜・啣 ③顯・蜆・險・喊* ④憲・獻・献・見*・現・峴・莧・俔・縣・限・陷・餡	ㄙㄧㄢ	①先・仙・僊・秈・鮮*・纖・孅・暹・姍* ②涎 ③銑・跣・姺・燹・鮮*・尠・蘚・癬* ④線・纖・腺・羨・霰	
ㄐㄧㄣ	①巾・斤・觔・筋・今・衿・	ㄗㄧㄣ	①浸*・津	本欄にある

	矜・金・*禁・襟 ② ③菫・謹・*僅・*瑾・饉・覲・緊・巹・錦 ④近・靳・*僅・瑾・*禁・噤		② ③儘 ④盡・藎・燼・贐・進・晉・搢・縉・寖・*浸	北京語では字は全てㄐㄧㄣと読む字である。このほか北京語でㄐㄧㄥと読まれている字も《韻白》ではㄐㄧㄣまたはㄗㄧㄣと変化する。《上口字》一の4参照
ㄑㄧㄣ	①*衾・欽 ②勤・懃・芹・覃・琴・琴・芩・*衾・禽・噙・擒 ③ ④撳	ㄘㄧㄣ	①*親・侵・駸 ②秦・螓 ③寢 ④沁	北京語でㄑㄧㄥと読む字もㄑㄧㄣㄘㄧㄣと変化する。《上口字》一の4参照
ㄒㄧㄣ	①欣・忻・鑫・歆・炘・昕・訢・馨 ② ③ ④釁・釁・衅・焮	ㄙㄧㄣ	①辛・莘・鋅・新・心・芯 ② ③伈 ④信・囟・顖・汛・迅・訊	北京語でㄒㄧㄥと読む字もㄒㄧㄣㄙㄧㄣと変化する。《上口字》一の4参照
ㄐㄧㄤ	①江・豇・疆・薑・僵・殭・繮・韁・姜 ② ③講 ④*虹・*降・絳・洚・*强	ㄓㄧㄤ	①*將・漿・螿 ② ③奬・槳・蔣 ④*將・醬・匠	
ㄑㄧㄤ	①羌・蜣・腔 ②*强 ③*强・襁・鏹 ④	ㄔㄧㄤ	①鎗・槍・蹌・瑲・*嗆・*搶・鏘 ②廾・戕・牆・墻・嬙・薔・檣 ③*搶 ④*嗆	
ㄒㄧㄤ	①香・鄉・鄉	ㄙㄧㄤ	①*相・箱・廂・湘・緗・襄・勷・鑲・驤	

	②降* ③餉・享・響・饗 ④巷・向・嚮・項		②祥・詳・翔・庠 ③想・鯊 ④象・像・橡・相*	
ㄐㄧㄥ	①京・鯨・驚・經・莖・涇・兢・荆・粳・更*・耕*・秔* ② ③景・憬・環・頸・剄・警・儆 ④竟・境・鏡・獍・敬・徑・逕・勁・痙・脛・競	ㄗㄧㄥ	①旌・睛・精・菁・箐・晶 ② ③井・阱・穽 ④淨・凈・靜・靖・靚	《韻白》には ㄧㄥという音はない。したがって《韻白》の場合には本欄のㄐㄧㄥ, ㄗㄧㄥは, 共にそれぞれㄐㄧㄣ, ㄗㄧㄣと変化する。《上口字》一の4参照
ㄑㄧㄥ	①輕・卿・傾* ②傾*・擎・檠・黥・剋 ③頃 ④磬・罄・謦・慶	ㄘㄧㄥ	①青・清・蜻・鯖 ②情・晴 ③請 ④親*	ㄑㄧㄥ, ㄘㄧㄥは《韻白》では, それぞれㄑㄧㄣ, ㄘㄧㄣと変化する。《上口字》一の4参照
ㄒㄧㄥ	①興* ②形・邢・刑・型・行* ③ ④幸・倖・悻・婞・行*・荇・杏・興*	ㄙㄧㄥ	①星・腥・猩・惺* ② ③省*・醒・惺*・擤 ④姓・性	ㄒㄧㄥ, ㄙㄧㄥは《韻白》では, それぞれㄒㄧㄣ, ㄙㄧㄣと変化する。《上口字》一の4参照
ㄐㄩ	①居・据・裾・琚・屈・車*・拘・駒・俱* ② 入 橘・局・侷・跼・菊・掬・踘・鞠・鞫 ③舉・莒・矩・榘 ④據・遽・醵・倨・鋸・踞・句・屨・窶・瞿*・懼・具・俱* 颶・巨・拒・炬・鉅・距・詎	ㄗㄩ	①疽・苴・狙・趄・雎・沮* ② ③咀・沮*・齟 ④聚・駔	

	秬・苴・劇			
ㄑㄩ	①祛・區*・軀・驅・嶇 ②渠・戵・瞿*・衢・癯・蘧・劬入屈・詘・曲・麴・麯 ③鸜 ④去	ㄘㄩ	①蛆・趨 ②入猝 ③取・娶 ④覷・覷・覷・趣	
ㄒㄩ	①虛・噓・歔・墟・吁・訐 ②入洫・畜*・蓄・勖・頊・旭 ③許・詡・栩・煦・咻* ④酗	ㄙㄩ	①胥・糈・須・鬚・嬃・需・繻 ②徐入戌・恤・卹・續・蟀・窣 ③醑・湑・糈 ④絮・敘・溆・序・緒・婿・壻	
ㄐㄩㄝ	① ②入決・抉・玦・訣・觖・鴂・噱・倔・掘・崛・孓・譎・厥・劂・蕨・瘚・橛・蹶・獗・鱖*・撅・噘・角*・脚*・覺*・矍*・攫* ③ ④	ㄗㄩㄝ	① ③入絕・爵*・嚼* ③ ④	1. 本欄中の一部の字は《韻白》のなかで，ㄐㄩㄝがㄐㄧㄠに，ㄗㄩㄝがㄗㄧㄠに変化することがある。《上口字》十参照 2. 躍は北京語でㄐㄩㄝと読むが，《韻白》ではㄐㄧㄠとしか読まぬので本欄より除外してある。
ㄑㄩㄝ	① ②入瘸・卻*・確*・殼*・缺・闕・闋 ③ ④	ㄘㄩㄝ	① ②入碏*・雀*・鵲* ③ ④	1. ㄑㄩㄝ，ㄘㄩㄝは，《韻白》のなかでそれぞれㄑㄧㄠ，ㄘㄧㄠと変化することがある。《上口字》十参照

				2. 慤，椎，碻は北京語でくㄩㄝと読むが《韻白》ではくㄧㄛとしか読まないので本欄から除いてある《上口字》十参照
ㄒㄩㄝ	①靴 ②入學*・穴*・血* ③ ④	ㄙㄩㄝ	① ②入薛・雪 ③ ④	1. ㄒㄩㄝは《韻白》のなかでㄒㄧㄛと変化することがある《上口字》十参照。 2. 削は北京語でㄒㄩㄝと読むが，《韻白》ではㄙㄧㄛとしか読まぬので本欄から除いてある《上口字》十参照
ㄐㄩㄢ	①捐・娟・涓・鵑・鐲 ② ③捲・卷* ④卷*・倦・圈*・眷・睠・絹・狷・悁・隽	ㄗㄩㄢ	①鐫・朘* ② ③ ④	
ㄑㄩㄢ	①圈* ②拳・蹤・惓・卷*・蜷・鬈・權・顴 ③犬・畎・綣 ④券・圈*・勸	ㄘㄩㄢ	①悛 ②泉・全・荃・痊・詮・筌・銓・輇・牷 ③ ④	
ㄒㄩㄢ	①萱・諼・喧・諼・暄・煊・諠・軒 ②玄・懸 ③烜	ㄙㄩㄢ	①宣・揎 ②旋*・漩*・璇・璿 ③選・癬*	

	④泫・炫・眩・衒・鉉・楦・絢・眴		④渲・旋*・漩*・鏇	
ㄐㄩㄣ	①均・鈞・君・困・麕・軍・皸 ② ③窘* ④郡・菌	ㄗㄩㄣ	① ② ③ ④峻・竣・浚・俊・餕・駿・雋・濬	
ㄑㄩㄣ	① ②羣・裙 ③ ④	ㄘㄩㄣ	①逡 ② ③ ④	
ㄒㄩㄣ	①熏・壎・燻・勳・勛・薰・醺 ② ③ ④訓	ㄙㄩㄣ	① ②循・巡・廵・馴・旬・洵・詢・恂・珣・荀・郇・峋・尋・潯・鱘 ③ ④徇・殉・遜*・巽*・噀*	
ㄐㄩㄥ	①坰・扃* ② ③迥・泂・炯・扃*・窘* ④	ㄗㄩㄥ	① ② ③ ④	該当する《尖字》なし
ㄑㄩㄥ	①穹*・芎* ②邛・笻・蛩・茕*・穹*・窮・惸・煢・瓊・琼 ③ ④	ㄘㄩㄥ	① ② ③ ④	該当する《尖字》なし
ㄒㄩㄥ	①凶・兇・匈・詾・胸・洶・兄・芎* ②熊・雄 ③ ④	ㄙㄩㄥ	① ② ③ ④	該当する《尖字》なし

〔注〕 稿を改めて《上口字》について論述するさい言及するが，京劇の《韻白》では，結合母音ㄧㄥがㄧㄣと変化して発声されるため，《尖字》《團字》のうち，ㄗㄧㄥとㄗㄧㄣ，ㄐㄧㄥとㄐㄧㄣの相互関係については，次のように言うことができる。

1. 現代北京語でㄐㄧㄥと読む字（例えば，京・競・旌・井……）は，まず，《尖音》のㄗㄧㄥ（旌・井……）と《團音》のㄐㄧㄥ（京・競……）に分類される。ㄑㄧㄥ，ㄒㄧㄥについても同様で，それぞれ，ㄘㄧㄥ，ㄑㄧㄥおよびㄙㄧㄥ，ㄒㄧㄥに分かれる。
2. 次に，結合母音ㄧㄥは，すべてㄧㄣと変化するから，ㄗㄧㄥはㄗㄧㄣ，ㄐㄧㄥはㄐㄧㄣと変化する。ㄘㄧㄥ，ㄑㄧㄥおよびㄙㄧㄥ，ㄒㄧㄥについても同様に変化する。
3. 現代北京語でㄐㄧㄣと読む字（例えば，今・斤・儘・進……）は《尖音》のㄗㄧㄣ（儘・進……）と《團音》のㄐㄧㄣ（今・斤……）に分かれる。
4. 以上三つの発音上の規則を総合して，次のように言うこともできる。
   (1) 《團字》のㄐㄧㄥ（例えば，京・競……）とㄐㄧㄣ（例えば，今・斤……）は，《韻白》の場合には，発音上の区別がなく，《京・競・今・斤……》などは，いずれも同様にㄐㄧㄣと発音する。
   (2) 《尖字》のㄗㄧㄥ（例えば，旌・井……）とㄗㄧㄣ（例えば，儘・進……）は，《韻白》では発音上の区別がなくなって，《旌・井・儘・進……》は，いずれもㄗㄧㄣと発音する。
   (3) ㄑㄧㄥとㄑㄧㄣ，ㄘㄧㄥとㄘㄧㄣ，ㄒㄧㄥとㄒㄧㄣ，ㄙㄧㄥとㄙㄧㄣについても以上と同様のことが言える。

前述したように，現代北京語には《尖音》が無いので，いまの話しことばでは，これらの《尖字》と《團字》は区別されず，すべて《團音》で発音されている。例えばいま北京語でㄒㄧ˫ㄗㄨ˫と言えば，《休書（離縁状）》とも聞こえるし，《修書（手紙をしたためる）》とも聞こえるのであるが，京劇では《休書（書は《上口字》に属するので実際にはㄗㄩと発音

される)》としか考えられない。なぜかといえば，修は《尖字》であり，京劇では必ずㄙㄧㄡと発音するからである。

《御碑亭》の劇中，王有道の妻，孟氏が歌う「一見休書如刀絞」の歌詞も，もちろんㄒㄧㄡと読むべきであり，ㄙㄧㄡと読んだのではぜんぜん意味が違ってくる。《烏龍院》のせりふのなかにも《休書》のことばがでてくるが《尖團》の別はおろそかにできない。また，《磐河戦》の劇中にも「原來如此。吾修書不及。照書行事。便了。」というせりふがあるが，ここでもしㄒㄧㄡと読んだのでは「離縁状」ということになって聴衆の誤解を招くことは必至であるし，《戯叔》の劇中，武大が潘金蓮に「開口休書，閉口休書。」というくだりがあるが，もしこれをㄙㄧㄡと読んだのでは「手紙を書く」というふうに聞こえ，聴衆に「離縁状」として受けとらせることはできないのである。

北京京劇団の役者であった趙燕俠は曽て一座の幹部女優であったが，人民日報（1962年10月7日付）紙上におよそ次のような意味のことを述べている。

『例えば《花田錯》の劇中，「在渡仙橋前遇才郎」という歌詞があるが，仙と前はいずれも《尖字》である。しかしこの二字はたいして距離的にも離れていないので，どちらも《尖音》で発音したのでは耳ざわりでもあり，また不明瞭である。そこでわたしは仙だけは原則どおり《尖音》でㄙㄧㄢと発音し，前は北京音でㄑㄧㄢと発音することにしている。また，同じ劇中に「請出了小姑娘細説端詳」のくだりがあり，小，細，詳はすべて《尖字》である。ここでも聴衆が聞きとりやすいようにするため小と細は北京語の発音と同様の《團音》で発音し，詳だけを原則どおりに《尖音》で発音することにしている。』

一番初めにある請も《尖字》であるが，この字にはふれていないところをみると当然これは原則どおり《尖音》で《上口》してㄑㄧㄥと発音するものと考えられる。要するに《尖字》であっても《團音》で発音するほうが観衆に理解されやすいと思われる場合とか，また，《團音》で発音する

ほうが耳ざわりにならないと思われるときは，必ずしも原則どおりにやらなくてもよいのであって，これは個々の歌詞によってそれぞれ違ってくるものであると言っている。つまり原則はあくまでも原則であるが，その実際の運用にあたってはこのような考えかたをする役者も最近はいたということである。

あとがき

古典京劇をやるうえで欠かせない発音上のきまりは，おおまかに言って本稿の《尖團字》と《上口字》であろう。頁数の都合でこの両者を同時に述べることのできなかったのは残念であるが，別の機会に《上口字》の運用についても発表しようと考えているので，本稿と併せてお読みいただければいっそうはっきり理解していただけるものと信じている。そのさいにおける参照の便を計るため，本稿の表の備考欄には《上口字》のどの項目を見ればよいかを予め注記しておいた。